# フロイデ彦島　Freid Hikoshima

# 潮風が吹き抜ける高齢者の共棲の場

# Collective home for the elderly with a soothing channel breeze

# 受賞：BCS賞 / 医療福祉建築賞2007​ / 2007日本建築大賞ファイナリスト

# 所在地：山口県下関市彦島西山町

建築主：社会福祉法人松涛会

# 用途：児童福祉施設等(ケアハウス・グループホーム・デイサービスセンター・ホームヘルパーステーション・防災拠点型地域交流スペース・ゲストルーム)

設計：アプルデザインワークショップ

# 構造設計：構造設計集団SDG

設備設計：総合設備計画

# 施工：大成建設広島支店

# 建築面積：1991.05

# 延べ床面積：4895.05

構造規模：RC造3階建

# 竣工：2005.7

写真：北嶋俊治

掲載：JIA2007/280-281、新建築200702/062-071、建築ジャ−ナル200911/、BCS2007/84-89、『病院８』vol.68, No.08, 89-94, 医学書院, 2009、『医療タイムス』, No.1869, 3-5, 医療タイムス社, 2008、『Dr. Holiday 126』, 38-40, 共和メディコカスタマー, 2008、『医療福祉建築』 No.155, 16-19,日本医療福祉建築協会, 2007、『バリアフリー＆ユニバーサルデザイン内装要覧09』 51巻13号, 57-62,インテリアタイムス社, 2008、『介護保険５』 No.159, 3-7,法研, 2009

自然との触れ合いを楽しむ空間構成------風景に身を沈める

フロイデ彦島は老人保健施設であり、グループホーム（１８室2ユニット）とケアハウス（個室４６室6ユニット、内２室が夫婦対応）を複合した施設である。

この施設は、関門海峡を見下ろす崖の上に立つ。当初、台地の上に中層のタワーを建てる案も検討されたが、敷地のもつ可能性を最大限生かすために３層の建物を地形になじませながら配置した。

敷地は下関市の端にあって本州と水路で隔てられた小島であり、その頂部にあるため、対岸に北九州市の重工業の工場群を遠望することができるだけでなく、最上階からは、日た装置は、日よけ付きハイバックチェアとして座っても良いし、植木鉢置き棚として使っても良い。外部に向かっては、白い帆のように見え、人のすまいの在処を示している。

人の和をはぐくむ---------施設から住まいへ

フロイデ彦島は、食堂などの共用設備もあり、言ってみれば老人たちが共同生活する寮である。大きい棟の一階に施設全体の共用諸室（食堂、居間）と地域施設（デイサービスセンター、防災拠点型地域交流スペースなど）が置かれ、その上の２層が居室である。小さい棟では３層とも居室が入っている。居室は原則個室で、９室の個室が一つのケア単位を作り、それぞれが共用施設としてキッチン設備のある居間と浴室などを持っている。これらの諸室は２重の入れ子構造として配置されている。中庭と食堂とが絡み合った空間を核にして、その周辺に各グループの共用空間を配し、それを赤い壁で囲い込む。その外に白い個室空間が取り巻く。

ケアユニットは、管理の効率のためである。適正な料金と質の高いケアのために必要である。また、小グループは居住者が帰属感を抱き易く、心の安寧を得やすいというメリッ-廊下-グループ共用−中庭-施設共用」を明確にする。しかし、同時に小グループは、擬似的な家族を構成するために人間関係の緊張も避けられない。そこで、視覚的、心理的に他のユニットと触れ合える可能性を建築が提供することが必要である。この建物全体で四つの中庭に面する各グループの共用空間に入ると、そこは赤い壁に囲まれ、中庭を透かして他の赤い壁に中にいる人達の様子や、館全体の活動の様子が目に入る。窓を明ければ話し声が聞こえてくる。同時に、中庭があることで、建物の中央部にある共用空間にいても、赤い壁に穿たれた開口を通して海の気配も感じられる。どこにいても人と自然の両方の気配が感じられる場が現出している。日本語の「気配が伝わる」という語は、ある種の空間の透明性を言う優れた用語と言ってよい。

地域と共生する

フロイデ彦島の経営主体である社会福祉法人松濤会は高齢者施設と地域の共生に積極的に取り組んでいる。単に地域の高齢者のお世話をし、スタッフを雇用するだけでなく、地元の子供達を呼んで高齢者と時間を過ごす機会を作ったり、音楽会を開催して地域の人とともすごしたりと極めて多面的に地域に溶け込んでいる。透明性と閉鎖性を適度に兼ね備えた空間は、住民たちに公共施設以上に公共的な場を提供している。

# ​